

History of TATAMI and Change of TAYAMI OMOTE

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-03 キーワード (Ja): キーワード (En): TATAMI, TAYAMI OMOTE, TATAMI DKO, rush, Inertia 作成者: 平井, 郁子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/354

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



畳の歴史と畳表の変化

平井郁子
大妻女子大学短期大学部

History of TATAMI and Change of TATAMI OMOTE

Ikuko Hirai

Key Words : TATAMI, TATAMI OMOTE, TATAMI DKO, rush, Inertia

1. はじめに

和風建築には欠かせないものに畳がある。畳は多湿の日本の気候によく合い、食卓、寝床、座敷など部屋をいろいろな用途に使用することを可能にした大変便利なものである。

しかし、最近の洋風建築、集合住宅から畳は姿を消し、若い人たちの生活から遠ざかり、畳での正座、挨拶といった生活習慣も一般的なものではなくなってきた。このような畳の使用の減少から、畳表の原料である藁草の国内生産は激減し、中国からの輸入も減少傾向にある。

このような畳離れが進んでいる一方で、畳の生活習慣が見直されつつある。さらに、藁草の生産・輸入減少のため、素材に工夫を凝らした新しい畳も出てきている。

本研究では、畳の出現からわたしたちの生活に定着し、そして離れていった畳の歴史と、新しい畳表の素材について取り上げ、その変化について検討することを目的とする。

2. 調査方法

調査方法は、次の3つを用いた。

- 1) 文献による調査
- 2) 藁草生産地、熊本県八代への取材
2007.8 熊本県農業研究センター 一業研究所、藁草生産農家訪問見学
- 3) 現在市販されている畳(畳表、畳床)の調査
 - ① 畳床の断面写真観察
 - ② 畳表の顕微鏡での側面・断面観察
オリンパス(株)製の走査型共焦点レーザー顕微鏡 LEXT OLS 3000 を用いて行った。

3. 調査結果および考察

(1) 畳の歴史

畳の語源¹⁾は『たたむ』ことを意味し、折り重ねる意味もあり、たためるもの、重ねられるものなど、敷物のすべてを意味したものである。日本文化の多くは中国、朝鮮から伝来したものであるが、畳は、日本で発達してきた敷物で、原始的な毛皮や筵などの敷物に縁をかがる成形技術などが加わり、発展してきたものと考えられている。

『古事記』には、「菅畳」、「皮畳」、「純畳」が記されている。また、『日本書紀』には、「八重席薦」の記録がある。さらに、『万葉集』の歌の中には、「木綿畳」、「八重畳」、「畳薦」が見られる。

平安時代になり、『枕の草子』の清涼殿内の描写のなかに「たたみ」文字があり、畳は上流社会において使用されていたといわれている。また、居間・寝所にあてられていた御帳台²⁾には四方に几帳をたれ、縹緗縁の厚畳を敷き、その上に上筵が敷かれていた。

やがて、鎌倉時代から室町時代にかけて書院造が完成され、この頃になると部屋全体に畳が敷き詰められるようになる。

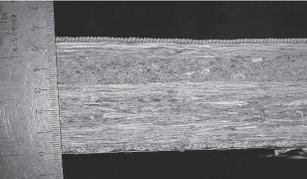
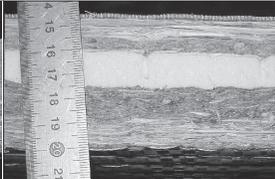
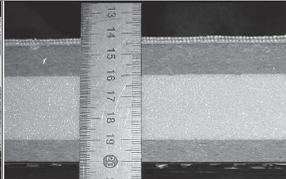
桃山時代から江戸時代へと移り、書院造は茶道の発達により、茶室の意匠や手法を取り入れた数寄屋風書院造となる。茶室建築から畳は町家に引き継がれ、畳が一般庶民のものとなったのは江戸時代中期以降のことであり、農村においてはさらに遅く、明治時代になってからである。

現在、畳の大きさにはいろいろなものがあり、畳の基本寸法³⁾を表1に示す。なお、江戸時代は1間が6尺が中心であったが、畳の寸法が規格化(京間:6尺3寸)され、その畳の割付けによって柱間

表 1. 畳の基本寸法

名称	別名	サイズ (cm)	分布
本間 (ほんま)	京間	191×95.5	関西、中国、四国、九州
三六間 (さぶろくま)	中京間	182×91.0	東海、近畿、四国、東北
五八間 (ごはちま)	関東間、いなか間	176×88.0	関東、甲信越、北陸、東北、北海道
五六間 (ごろくま)	団地間、公団サイズ	170×85.0	公団住宅、アパート、マンション等

表 2. 畳床の構造と断面写真

	稲わら畳床	ポリスチレンフォーム サンドイッチ畳床	インシュレーション ボード畳床
構造と材料	4層 稲わら	4層 稲わら インシュレーションボード ポリスチレンフォーム 稲わら	3層 インシュレーションボード ポリスチレンフォーム インシュレーションボード
断面写真			

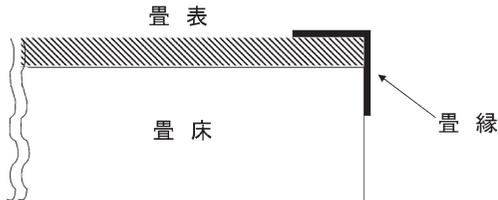


図 1. 畳の構造 (断面図)
畳表 (藁草) の断面と側面



図 2. 藁草 (2007.8 撮影)

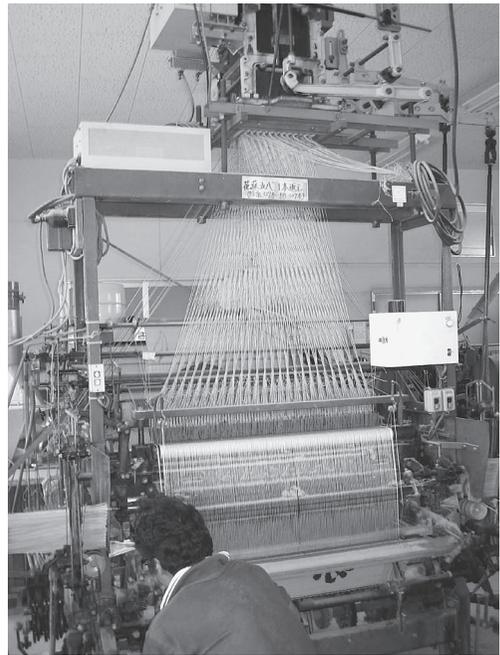


図 3. 畳表の織機 (2007.8 撮影)

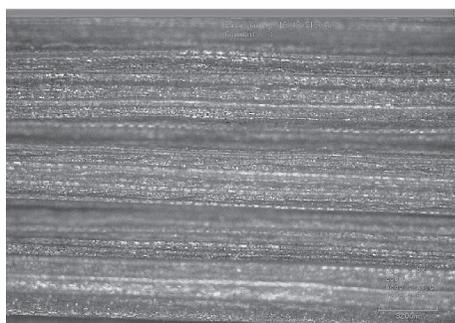
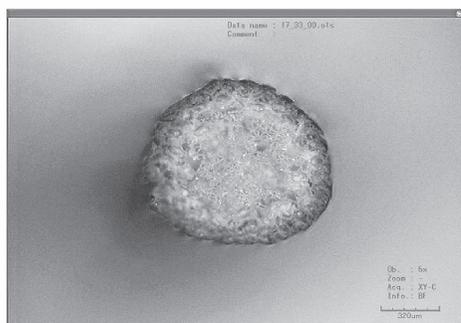
が決められていたが、柱割りでは部屋の大きさ、柱・敷居の寸法により、畳の寸法が異なることになる。

(2) 畳の構造と種類

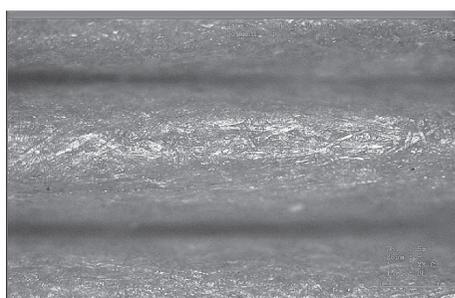
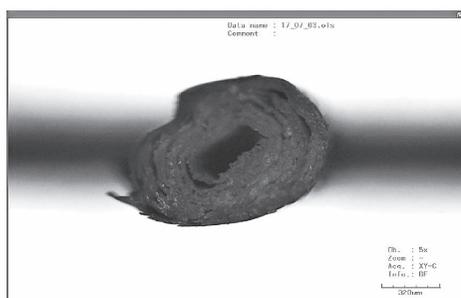
畳の構造は、表面に見える畳表たたみおもてと芯の部分にあたる畳床たたみどこに畳縁たたみべりを縫いつけたもので構成されている。最近では、畳縁のない坊主畳もあり、畳の構造(断面図)を図1に示す。

1) 畳床

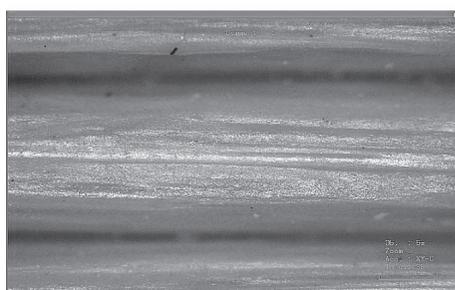
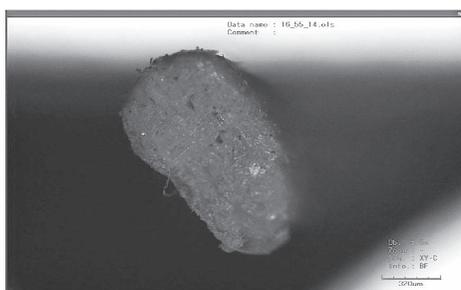
畳床は、弾力性、保温性、調湿性などの高い機能性を持つ。畳床は、従来稲わらを圧縮して縫い合わせたものを使用していたが、最近では軽量化や、ダニやカビが繁殖しやすいこと、生産性の問題から発泡ポリスチレン板(ポリスチレンフォーム)や軟質繊維板(インシュレーションボード)が多用されている。試料として用いた「稲わら畳床」、「ポリスチレンフォームサンドイッチ畳床」、「インシュレ-



畳表(藁草)の断面と側面



畳表(紙)の断面と側面



畳表(プラスチック)の断面と側面

* オリンパス(株)製 走査型共集点レーザー顕微鏡 LEXT OLS3000 にて撮影

図 4. 畳表(藁草・紙・プラスチック)の断面と側面

ションボード畳床」の構造と断面写真を表 2 に示す。

2) 畳表

畳表は、藁草を主原料として作られている。藁草を緯糸に、麻糸あるいは綿糸を経糸として織られたものである。藁草は、染土をとかした泥水の中に一度漬けて泥染めしてから乾燥させる。図 2 に緯糸に用いられている藁草 (2007.8 撮影) を、図 3 に畳表の織機 (2007.8 撮影) を示す。

岡山県、広島県、熊本県で生産される備前表、備中表、備後表が有名であるが、最近では、藁草以外の素材 (紙、プラスチック) の畳表もある。図 4 に畳表に用いられている藁草、紙、プラスチックの断面写真 (レーザー顕微鏡写真) を示す。図 4 の断面写真から、藁草の断面には無数の中空構造が見られる。この中空構造によって部屋の吸湿、断熱・保温、空気清浄作用を行うと考えられている。このような構造を有するため夏は涼しく、冬は暖かいという、日本の気候に適したインテリア素材といえる。

また、最近の新素材である紙、プラスチックの畳表も外見からは、藁草の畳表と変わりなく、見間違えるほどである。図 4 の断面写真から、それぞれ中空構造を施し、藁草の断面形状を真似て、藁草の性能に近づけている工夫がうかがえる。

以上のことから新素材は、藁草にどのくらい近い性能を持つのか、あるいは藁草以上の性能を持つのか、今後の検討課題である。

(3) 畳表と藁草の生産量

図 5 に畳表 (藁草) の供給量⁷⁾を示す。図 5 から国内生産量と輸入量を含めた畳表の供給量は、平成 17 年まで 3,000 万枚程度あったが、平成 19 年は 2,500 万枚、平成 20 年以降は 2,000 万枚と減少傾向にある。そのうち国内生産量は、平成 11 年までは輸入量より多かったが、平成 21 年には輸入量が国内生産量の 3 倍以上となり、わずか 432 万枚となっている。輸入先はほとんどが中国である。

表 3 に藁草の生産の推移⁸⁾を示す。藁草の作付面積は、減少傾向にある。平成 10 年 4,420 ha あったものが、平成 21 年は 77.4% 減り、1,000 ha となっている。もちろん収穫量も作付面積の減少と比例して 69.6% 激減している。作付面積減少率より収穫

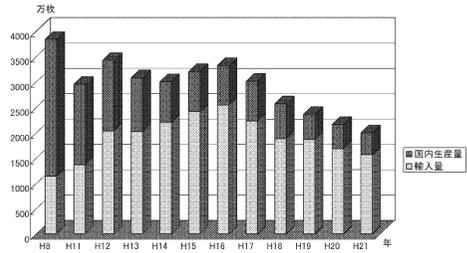


図 5. 畳表の供給量

表 3. 藁草の生産量

年	作付面積 (ha)	収穫量 (t)	産農家数 (戸)
H10 年	4,420	47,000	—
H11	3,490	36,300	—
H12	2,730	29,400	—
H13	1,870	21,300	—
H14	1,810	20,700	1,340
H15	1,870	20,500	1,330
H16	1,800	20,700	1,260
H17	1,700	21,800	1,170
H18	1,370	15,300	1,030
H19	1,110	15,200	851
H20	1,070	13,700	806
H21	1,000	14,300	767

表 4. 藁草と他作物との収益と労働時間

	10 a 当たり			労働時間 (h/10 a)
	粗収益 (円)	所得 (円)	水稻 = 100	
藁草 (畳表)	690,000	295,000	1,114	518
稲作経営	108,781	26,485	100	28
露地野菜 (キャベツ)	392,000	182,000	687	267

* 農林水産省統計部 (平成 19 年)

表 5. 新設住宅着工戸数と畳枚数

	新設住宅着工戸数 (万戸)* ¹	全世帯数 (万戸)* ²	総枚数 (万戸)* ²
平成元年	166	4,056	1,716
5	151	4,308	1,736
7	148	4,424	1,464
9	134	4,550	1,324
11	123	4,681	1,245
13	117	4,864	1,391
15	117	4,984	1,166
17	125	5,110	1,022
19	104	5,232	1,057
21	78	5,288	841

*¹: 国土交通省「建築着工統計調査」より

*²: 総務省「家計調査」「小売物価統計調査」「住民基本台帳に基づく世帯数」より

量の減少率が少ないのは、面積あたりの収穫量が増加しているといえる。また、藎草の生産農家数は、平成 14 年に 1,340 戸あったものが、平成 21 年には約半分の 767 戸となっている。生産農家減少は、畳の使用量の減少など、幾つかの理由が重なっているが、一つには表 4 に示す他の作物栽培との労働時間の違いが挙げられる。なお、畳表になるまでの労働時間は、稲作の 18.5 倍にも及ぶ。

表 5 に畳替え枚数（藎草以外も含む）の推移⁷⁾を示す。平成元年全世帯数は 4,056 万戸で畳替えの総枚数は 1,716 万枚であった。平成 20 年全世帯数 5,288 万戸に対して畳替え総枚数は 841 万枚と激減している。また、新設住宅着工戸数は、平成元年は 166 万戸であり、平成 14 年まで減少傾向であった。平成 15 年から平成 18 年まで景気回復により上昇に転じたものの、平成 19 年から景気悪化により激減し、平成 21 年には 78 万戸となった。

4. まとめ

畳は日本の気候、風土を生かし、根付いてきた日本独自のインテリア材料である。長い歴史をもち、私たち日本人の住生活を快適なものにしてきたが、洋風建築、洋風な生活様式とともに、減少してきている。資料と現地調査から畳および畳表の供給量が激減している理由には、調査結果および考察で述べ

たように、次の 6 つが考えられる。

- 1) 住宅の洋風化にともない、世帯における畳の購入量が減少している。
- 2) 景気悪化により、新設住宅着工戸数が激減している。
- 3) 藎草の作付面積当たりの労働所要時間が他の作物栽培よりも何倍にも及ぶ。
- 4) 藎草生産農家が減少している。
- 5) 藎草の供給量は全体として減少しているが、国内生産より輸入品が多くなっている。
- 6) 藎草以外の素材を用いた畳表が出てきている。

畳表の原料である藎草の生産も国内だけでは、難しくなり輸入品、あるいは藎草に代わるものが開発されてきている。日本の伝統を守る上でも、藎草だけでなく、デザインや形を変えた畳の出現も当然必要不可欠である。しかし、畳表の機能性においては、従来の藎草を用いた畳を超えるものは今のところ出現していないと考える。できるだけ畳の減少を抑えつつ、現代の科学を用いた畳の開発に期待したい。

謝辞

本研究を進めるに当たり、国内の藎草の大部分を生産している熊本県の現地調査において、熊本県農業研究センターい業研究所の西田伸介氏には、研究所の見学、藎草生産農家の訪問見学など、暑い中一日中お付き合いいただいた。また、オリンパス（株）の鈴木等氏、泉寿江氏には、レーザー顕微鏡の写真撮影にご協力いただいた。さらに（有）大矢畳店の大矢浩氏には、畳床、畳表の試料の提供をいただいた。多くの方々には大変お世話になり、大変感謝申しあげます。

参考文献・資料

- 1) 山田幸一、佐藤理；畳のはなし、鹿島出版会、1997
- 2) 小野教孝；定本新国語図録、共文社、1996
- 3) 田中、川村、三上、横山、高橋；新・建築材料 II、数理工学社、2005
- 4) 日本工業標準調査審議会；稲わらサンドイッチ畳床、JIS A 5901, 2004
- 5) 日本工業標準調査審議会；畳、JIS A 5902, 2004
- 6) 日本工業標準調査審議会；建材畳床、JIS A 5914, 2004

- | | |
|---|---|
| 7) 生産局生産流通振興課；いぐさ（畳表）を巡る事情，農林水産省，2010.5 | 9) 鈴木洋行；繊維機械学会誌，vol. 59, No 2, P. 17-22 (2006) |
| 8) 日本放送協会編集；トラッドジャパン No. 5, 日本放送出版協会，2010 | 10) 石川順一；繊維機械学会誌，vol. 59, No 2, P. 29-35 (2006) |

Summary

TATAMI which is an interior material from old age in Japan has not been used by western style of housing. TATAMI is suitable for Japanese climate very well and it has been used until recent time, changing the form and size little by little from Heian Era. In the present day, the materials of TATAMI which has been used from old age are decreasing, and new materials of TATAMI are developed. The rush which has been used especially as the materials of TATAMI-OMOTE are decreasing sharply. The reason is considered the followings.

- 1) The purchase amount of TATAMI in a household is decreasing by western style of housing.
- 2) New built houses are decreasing sharply by business recession.
- 3) The amount of domestic production of rush is decreasing and the amount of imported materials from China is increasing.
- 4) Much labor time is required per planted area of rush.
- 5) Farmhouses which produce rush are decreasing.
- 6) TATAMI-OMOTE other than rush has developed.

TATAMI is a environment-friendly interior material, and so it is has been evaluated to be suitable for Japanese climate. I want to expect that TATAMI which is a traditional Japanese interior material will return to our life with taking western style.